

労働価値説の歴史と現代

—ミーク『労働価値論研究』について—

1

価値論の歴史についての概説書としては、外國の文獻では、カウラ(R. Kaulla, *Die geschichtliche Entwicklung der modernen Werttheorien*, 1906.), テュルジョン(C. Turgeon et C. H. Turgeon, *La valeur*. vol. I, 3. éd., 1925. vol. II, 2. éd., 1927. vol. III, 2. éd., 1927.) およびツッカーカンドル(R. Zuckerkandl, *Zur Theorie des Preises*, 1889.) などの著書をあげうるが、いずれも主観的価値論の立場からの労作であって、客観的価値論——労働価値説に對する偏見をまぬかれない。労働価値説の歴史について論じたホイッテイカー(A. C. Whitaker, *History and Criticism of the Labour Theory of Value in English Political Economy*, 1904.) はこのような偏見の著しい例である。わずかにリーブクネヒト(W. Liebknecht, *Zur Geschichte der Werttheorie in England*, 1902.) の著書があるが、あまりに古臭くて到底今日の研究に資しうるものではない。前世紀の後半に『資本論』が公刊されてのち今日にいたるまで、マルクス経済學(およびその一部分としての価値論)がヨーロッパのアカデミズムの内部でうけた取扱い方を考えるとき、価値論史のすぐれた文獻をそこから期待するのは到底無理であろう。

しかし、いま、私たちはロンルド・ミークの著書(R. L. Meek, *Studies in the Labour Theory of Value*, London, Lawrence & Wishart, 1956. 310p.) を手にした。おそらく本書は英語で書かれた労働価値説の研究のなかで最もすぐれた労作であろう。

ミークについては我國では一部ではよく知られている。彼の著書、論文の一冊の書物に翻譯されたものとしては、すでに、『マルクス・エンゲルス マルサス批判』(*Marx and Engels on Malthus*, 1953. の大島清及び時永淑兩氏による邦譯, 1955.) および『イギリス古典経済學』(最初期の3論文の吉田洋一氏による邦譯, 1956.) がある。ミークの今日までの経歴や業績については、これらの譯書にしるされた解説を参照されたい。ともかく、彼がモーリス・ドップと相並んで、現代イギリスがもつ最もすぐれたマルクス経済學者の1人であることは承認されねばならない。

もともと本書は著者によって労働価値説の歴史をテーマとして書かれたものではない。本書が現代に生きる1マルクス経済學者にとってもっともふさわしい、極めて緊切な問題意識から出發して著わされたことは序文にあ

きらかである。執筆の直接の動機は、1951年に著者とJ. ロビンソン女史との間で經濟理論上の問題について論じ合った往復書翰に由來するようである。すなわちロビンソン女史との相互理解の最大の障害が労働価値説の妥當性に關する見解の相異にあることがわかり、ロビンソン女史をして労働価値説の妥當性について納得せしめるために本書があらわされたのである。もちろん説得の對象はロビンソン女史のみではない。「誠實ではあるが懐疑的な非マルクス經濟學者」が一般に對象とされている。このような人々を相手にして労働価値説、およびマルクス經濟學全體の科學性を説得することで、ミークは、マルクス經濟學者と非マルクス經濟學者との間に架橋しようところをみる。この點、本書の意圖は故杉本榮一教授の「切磋琢磨」を連想せしめる。近代經濟學とマルクス經濟學との對決が本書の背景にすえられた課題であることを、私たちは忘れてはならない。また、このような課題の遂行が以下にのべるような體裁の著述に具體化したということも、はなはだイギリス的であると思われる。

しかるに、著述のすすむにつれて、これとは別の、しかしこれと關係のあるもう一つの目的があらわれてきた。それは非マルクス經濟學者に労働価値説を説得せしめるためには、労働価値説がマルクス生存當時の資本主義の分析に有効であったのみならず、その後變貌した現代の獨占資本主義の分析にもまた有効であることが證明されねばならないので、いわば労働価値説の再適用が本書の第2の目的とされたのである。この課題が重要且つ困難であることはいうまでもないが、ミークは本書中でしばしばその意義を高唱している。たとえば、第6章のJ. ロビンソンの批判をあつかった個所の結論の部分でつぎのようにのべている。すなわち、ロビンソン女史が *An Essay on Marxian Economics* の結論で、「もしも經濟學に進歩の希望があるとすれば、マルクスによって提起された諸問題をアカデミックな方法を用いて解決することでなければならぬ」というのは逆であって、「むしろつぎのように云う方がおそらくより眞實であるように私には思われる。すなわち、進歩の希望は、マルクスの方法を用いてアカデミックな經濟學者たちによって提起された諸問題を解決するというに存すると」(p. 238)。このミークの主張について私はかつてこれをとりあげて問題としたことがあるが(「Books—書物の花束」1956年11月號、座談會「マルクス經濟學と近代經濟學との對決をめぐって」)、極めて注目すべき主張であると思う。ミークはマルクス價值論がすべての點で完全であるとは

考えていない。『資本論』第3巻がマルクス自身によって十分に訂正されなかったという事実は別にしても、それは商品生産の特定の発展段階、すなわち競争的資本主義の段階の分析を本来の目的としている。マルクス価値論は、前資本主義、独占資本主義および社会主義の時代に適用されねばならないのであって、極めて多くの仕事がこのようにされている。この適用はマルクス主義者の本来の義務であるとのべられている (p. 242)。この仕事の重要性の認識はあまりにおそきに失した。その理由として、序文では、独占資本主義時代の継続の見込みについて、マルクス主義者があまりに楽観的すぎたことがあげられている。しかし他の箇所では、価値論の具体化の企てのなされなかったのは、マルクスの教義に対するマルクス主義者の側での迷信的崇敬によるものではなくて、むしろマルクス主義者の関心が資本主義の崩壊の問題のような労働者階級の運動に直接の関連をもつ他の理論的問題にしばしば向けられたからであり、又、1930年代以来、多くの國々の政治的状況がほとんど、マルクス主義の理論的原理の真面目な研究の発展をうながすようなものではなかったからであるとのべられている (pp. 202—3)。但しこの場合、マルクス価値論の発展といわれているものが他の學説との和解による「修正」ではなくて、あたらしい事態への「再適用」を意味することはいうまでもない。このような再適用が困難な問題を提供することもみとめられるが、その解決のためには、なによりもまずマルクスの見解そのものがただしく理解されねばならないとのべられている (p. 242)。

こうして本書はつぎのような構成を採用する。

- 第1章 アダム・スミス以前の価値論
- 第2章 アダム・スミスと労働価値説の発展
- 第3章 デヴィッド・リカードと労働価値説の発展
- 第4章 カール・マルクスの価値論 (1)
- 第5章 カール・マルクスの価値論 (2)
- 第6章 マルクス労働価値説の批判
- 第7章 マルクス労働価値説の再適用

ミークがとくに序文でのべたような意味で労働価値説の有効性を論證して、近代經濟學者を説得しようとしたところみた部分は、さしあたり第7章である。ここでは、(1)「限界革命」とその余波、(2)社会主義のもとでの「価値法則」の作用、および(3)独占資本主義のもとでの「価値法則」の作用、の3つの問題がとりあげられている。(1)では労働価値説にかわるあたらしい価値論の形成過程が J. S. ミルにまでさかのぼって探求され、さらにオーストリア學派およびローザンヌ學派における価値論の意義が検討されている。(2)では、社会主義のも

とでの価値法則の問題をまずマルクス・エンゲルスの古典について検討し、さらにソ同盟におけるこの問題の取扱いをブハーリン、レーニンから最近のスターリン著『ソ同盟における社会主義の経済的諸問題』にいたるまで相当詳細にたどっている。(3)では労働価値説を基礎にしての独占価格論の試みがなされている。しかし(2)(3)とも、いずれも試みのためのむしろ方法論的準備の段階を出ていない。例えば(3)についていえば、スウィージーは「独占価格のかなり一般的な法則」は存在しないとのべているが (P. M. Sweezy, *The Theory of Capitalist Development*, 1946. pp. 270—1), はたしてそうなのかどうか、ミークのここでの試論からは何とも云えない。

第6章は同じく第7章と並んで近代經濟學とマルクス經濟學との対決意識にむすびついた章である。ここではマルクス労働価値説の批判の3つの類型をあげて、それぞれを克明に批判している。だが、この2つの章をのぞくと、他の5章は序文でしるされた対決——兩陣營間の平和的競争のためのテーマの設定とあまりかかわりあいがなく考えられなくもない。しかし前述の如く、ミークは、マルクス価値論の再適用のためには、まず価値論そのものの正しい理解の必要をみとめているのであるから、そのために本書がいわば「急がば廻われ」式の迂回的コースをとったのかもしれない。それにしても序文にしるされた本書の目的と、本書の構成との間には若干のズレがあるように考えられてならない。水田洋氏の伝えるところによると、ミークのグラスゴー大學での講義は価値論史と厚生經濟學とであって、前者では重商主義から古典派をへてマルクスにいたる労働価値説の発展を対象としているというから (『社会思想史の旅』1956, p. 8), おそらく彼の講義案が本書中には収録されているのではなかろうか。

こうして本書の大部分は労働価値説の歴史にあてられている。まず、第1章では、教會法學者から重商主義を経て初期古典派にいたるまでに、いかに労働価値説が形成されてきたかをあつかい、第2, 3章では、スミスおよびリカードを対象とする。つづく第4, 5章がマルクスにあてられて最もくわしい。實はこの部分こそミークの価値論觀の心髓が示されるわけであるが、私はここで1, 2 不満とするところをのべておきたい。第4章はだいたい『資本論』以前のマルクスの經濟學の形成過程をとくに40年代の『經濟學・哲學ノート』と『哲學の貧困』とを中心にして論じ、またマルクス經濟學の方法について論じているが、ここで經濟學の方法としてのべられているものは、論理的—歴史的方法 (logical-his-

torical method) と生産の観点との2つに要約されると思われる。しかしこの方法がマルクスの価値論においていかに具体化されているかが必ずしも十分に明確にされていないのである。このことは換言すれば、史的唯物論と価値論との関連ということになると思われるが、著者自身この関連を重視している旨の言及があるにもかかわらず、充分徹底していないようである。實はこの點の明確にされることで、古典派労働価値説のマルクスによる克服と、近代経済學に對するマルクス經濟學の優越とが示されるはずである。もちろんミークはこの関連にしばしば言及してはいる。しかしそれが例えば、生産關係が交換關係を窮局的に決定するというような一般論におわっているきらいがある。(生産關係が交換關係を決定するという命題はしばしば強調されており、獨占價格論 [p. 287] やドップと同じく近代經濟學批判の際にも力言されている [p. 298.]。 (なお M. Dobb, *On Economic Theory and Socialism*, 1955. Chap. V. On Some Tendencies in Modern Economic Theory. 参照。)むしろ価値論そのものに即して史的唯物論との関連がひきだされるべきではなかったか。このような觀點からマルクスの価値論が考察される時、はじめて古典派とは異り、また近代經濟學によっては全く氣付かれていないその獨自性があかるといふのでなく、その獨自性があかるといふのでなく、すなわちマルクスの価値論には尺度論のみならず、實體論や形態論、さらに本質論ともみなされるべきものがあると思われるのである。(拙著『價值論と史的唯物論』1950、および『古典派經濟學とマルクス』1955、第8章参照。)しかるにミークの場合、価値論(というよりは商品論—そして商品論という視角こそ第一に要請されるのにミークにはその自覺が乏しいようである)の論理構造に即しての史的唯物論との関連の究明が缺けているために、その把握を平板なものにしていることはつぎの第5章のマルクス價值論の分析にあからさまにあらわれている。というのは、この章のなかで、ちよくせつ價值形態論について言及しているのは、わずか1頁分 (pp. 173—4) であり、また物神崇拜論について言及しているのは3頁分 (pp. 174—6) でしかない。さらに實體論についてすらミークの取扱いかた、ないし把握そのものに不十分な點がある。商品價值の實體はいうまでもなく抽象的・人間的労働であり、また同時にかかるものとして獨立的・社會的性格を有しているのであるが、それがしばしば價值そのものと混同(といつては云いすぎであろうか)されているような感があるのである。しかもこのような一連の缺陷が價值の尺度についてすら徹底した把握を困難にしているのではなかろうか。(例えば價值の内在的尺

度と外在的尺度との區別と関連〔移行〕とについての理解はどうであろうか。)私はこれらの點についてのちに古典派の労働價值説の生成を論じた第2, 3章をめぐって指示したい。

2

ミークは労働價值説の生成過程について、教會法學者—重商主義—古典派の順序でたどる。その際、生産の観点—流通の観点—生産の観点の定式が設定されることで、重商主義は労働價值説の系譜より脱落し、むしろそれは效用説ないし需要供給説の系譜につらなるものとされる。このような定式は便利なものではあるが、充分の論證がないかぎり單なる定式におわってしまう。ミークの論述は極めて簡單であつて充分なものとはいえない。しかしこの見方そのものは正しいであろう。元來、労働價值説の生成ははじめ古典派の自然價格論を媒介としてなされたとみられる。教會法學者(とくにここでとりあげられているのは、トマス・アクィナスである)の價值概念の中心はいうまでもなく公正價格であり、たとえ倫理的なものであるとはいえ、その構成要素は主として生産費(労働、危険、原料および輸送費等々)であるという意味において、教會法學者の見解は重商主義者よりも古典派の見解にちかいとされる。しかし商品生産=流通の範圍の擴大するにつれて、價格決定の上で中世的公正價格の觀念はしだいに力を失い、市場の盲目的支配力によってとってかわられるようになった。だが生産費によって價值を考へる習慣は直接生産者自身の意識のうちに根強くのこり、教會法學者の一切の經濟的遺産中最も影響力あるものの1つとなった。

「公正價格」の概念は「便宜的價格」(慣習的に支拂われ又受取られる價格)の概念の否定的媒介を通して重商主義的價值概念によってとってかわられた。一商品の價值(自然價值)はその現實の市場價格と同一視され、こうして價值の大きさは需給によって決定されるかのようにみなされた。かりに市場價格と區別された「内在的價值」が考へられる場合にも、それは生産費ではなくて效用と関連させられた。利潤の源泉については「讓渡利潤」説的見解が支配的であつた。しかし17世紀末にイギリスでは生産費説的接近が復活した。(例、ジョン・ケアリ。)要するに當時におけるマニユファクチュアの發達にともなう資本主義的賃労働の生産力の意義の認識は、富の源泉としての労働という命題を確立するにいたつたが、いまだに古典的労働價值説は形成されなかつた。労働よりはむしろ賃金費用が交換價值の規制者として注目されていたようである。だが18世紀に入ると、利潤の

独立の所得範疇としての把握（地代や賃金との區別）や譲渡利潤説の克服がおこなわれ、さらに古典的な自然價格の概念（そのうちには正常率の利潤が含まれる）の成立がみられた。自然價格論の創始者はアダム・スミスであるが、彼はその先驅者として、カンティヨン、ハリスおよびテンプルをもった。市場價格の中心點としての自然價格は主要費用プラス自然率の利潤によって構成されるとみられ、價格は恣意的な需給の支配に服するものとしてではなく、生産費の法則にしたがうものとして、その法則的把握が可能となった。ここから労働価値説へはもう一步というところであった。すなわち資本主義的商品生産の範圍の擴大につれて、「諸國民の富の本質と原因」の探求というような全體的な視點が要求されるとともに、もはや生産費のそれぞれの要素を獨立の規定因とみなすのは不合理と考えられるようになった。というのは、自然價格の構成要素自體が商品の價值に一部分依存するからである。そこで商品の自然價格を構成する生産要因の價值をも決定しうるあたらしい價值原理の探求がくわだてられた。さらに、利潤の源泉を流過程ではなくて生産過程にもとめるということになれば、一層あたらしい價值原理がもとめられざるをえなくなり、こうして労働価値説の生誕となる。スミスに先立つ労働価値説の生成過程が、ペティ、マンデヴィル、フランクリン、匿名氏 (*Some Thoughts on the Interest of Money in General*, 1738. の著者) などについてたどられる。この部分のミークの敘述で最も興味があるのは、労働価値説と分業との關係の指摘であって、彼は、17世紀的労働価値説とマニユファクチュアにおける分業とをむすびつけ、また18世紀的労働価値説と社會内部の分業とをむすびつけている。後者について云えば、社會内部の分業の重視によって、生産物の交換が實は社會的労働諸量の交換であるということが洞察されるにいたったとみられ、ここに古典的價值論の想源が見出される。

スミスとリカードとにおける労働価値説の生成はいかに評價されるべきか。もはやミークの見解をくわしく紹介する余裕がない。前にのべたミークの價值論觀についての私の批評とむすびつけてふれうるにすぎない。それにこの部分でのミークの見解は大體マルクスの立場に立つての古典派研究の軌道（我國においてうち出されたその定型のいくつかを想起されたい）に内容、形式ともに大體そうのものであって、さして新味はないのである。ミークはスミスについて『グラスゴー講義』より筆をおこして考察し、そこでの價值論と『國富論』でのそれとの相異に論及する。しかし問題はむしろ、『講義』での價值論——それは多分に獨立生産者の視點に立つ——がいかに

に『國富論』中に止揚されているか、ないしは止揚されていないかの内面的追求でなければならないと思われる。ミークはスミスの見解の發展の理由を1750、60年代における經濟的變化に歸し、またスコットに反對して重農主義者（とくにテュルゴー）の影響を重視している。『國富論』における價值論についてのミークの見解にはいろいろ問題とすべき點があるが、つぎの3點についてのみ論じたい。(1) ミークはスミスの價值論を支配労働価値説一本に解しすぎるきらいがある。スミスは社會的分業論より出發して價值の源泉論に到達したが、價值の實體論がないために、商品價值の尺度を生産過程ではなくて交換過程にもとめ、支配労働量をもって商品價值の尺度とみなしたという。だがミークのいう價值の源泉と實體とはいかに區別されうるのか。社會的分業論に立脚する價值源泉論はじつは實體論の未成熟なもの（労働の二重性發見以前）を意味するのであって、両者は別のものであるまい。後述の如くミークはリカードの實體論を過大評價し、かえってスミスについてはこれを過少評價するという、私見によれば、顛倒がみられるのである。(2) スミスのいわゆる「ストックの蓄積と土地の私有とに先立つ初期未開の社會狀態」をいかに解するかは、スミス價值論解釋上の試金石であると考えられる。これについてのミークの見解は、これを前資本主義社會として歴史的に解するようである。したがって又、投下労働価値説の妥當性もまた前資本主義社會へおいやられたという解釋に立つようであるが、——このような解釋は今日においても支配的である。——私見によれば支持しがたいものである。（くわしくは前掲『古典派經濟學とマルクス』第2章および高島善哉教授編『古典學派の成立』1954年、中の拙論参照。）じつは投下労働価値説は「市民社會」の分析のなかにもしばしば具體化してあらわれているのであって、その點にこそスミスの卓見がみとめられる。スミスの誤謬は歴史的實在としての單純商品生産と資本主義的商品生産との混同によるのみならず、その論理的區別の缺如にもよるのである。『グラスゴー講義』と『國富論』との關連もここに見出されるべきであろう。いったいにスミスにおける獨立生産者＝産業資本家の問題意識がミークに缺如していることは、水田洋氏も指摘される如くである。（前出、『社會思想史の旅』p. 59, 102）そしてその理由として、水田氏はミークにおいてスミスが（マルクスもまた）リカード化されている、それがまたマルサス——ケインズへの對決という理論戦線の特種狀況からくるとみられているが（p. 205）、まさにその通りであろう。だがミークのこのような態度はゆるされるべきであろうか。そこには經濟學史の「方法」

として、ぬきさしならぬ根本問題が伏在しているが、いま論じる余裕がない。ともかく、ミークの著書において純然たる學說批判としての經濟學史はギリギリの限界點に直面しているし、彼自身の初期の批判の對象であった目的論的アプローチへ彼自身別のかたちでおちこみつつかあるかのようにみえるのである。(3) スミスが支配労働價值説一本におもむいたかのような外見は、むしろ彼における價值の内在的尺度と外在的尺度との區別と關連(移行)の把握がないためである。これは價值形態論の缺如によるが、この點の解明が存しないのは、ミーク自身に前述の如く價值形態論の重要性に關する正當な評價が不足しているからであると考えられる。

つぎにリカードの價值論であるが、リカードの價值論史上の位置はスミスからの前進とマルクスへの道の準備という2點に見出される。このうちスミスからの前進については、『經濟原論』以前の勞作についてその過程があとづけられる。すなわちリカードの理論活動は通貨論争から開始するが、初期においてはリカードはスミスの謬見——賃金騰貴が價格の騰貴をもたらす、および利潤率が資本の競争によって低下するという謬見——の支持者であった。それが1815年『低廉な穀價が資本の利潤におよぼす影響を論ず』において資本蓄積と利潤率との關係についての周知の根本的命題がうちたてられることによって克服されたとみられる。1 商品の價值がその生産の難易に依存するという根本的命題もこの頃成熟した。『原論』においては、スミスの支配労働價值説や、投下労働價值説の初期社會への妥當性制限や、所得分配の變動の商品價值への影響説や、穀價騰貴による價格騰貴説の批判がおこなわれ、ここに投下労働價值説への徹底がみられるとともに、現實の資本主義社會への適用上さまざまな困難におつからざるをえなくなった。ここでとくに問題とされるのは、いうまでもなく有名なリカード價值論の「修正」という問題であるが、さすがにミークはスラッファに賛同してこの傳説を排撃している。(我國では、堀經夫博士がスラッファの研究を参照されて、舊説を自己批判されている。「經濟學論究」第6卷第3號、1952。) さらにマルクスへの道の準備という點については、リカードがその晩年において價值の實體概念へと到達しつつあったことがあげられる。その論據として絶對價值の概念の成熟が指示されている。すなわち晩年における不變の價值尺度の執拗な探求は、それによって尺度されるべき絶對價值——交換價值と區別された價值そのもの——の探求を實は意味するとされる。たしかにそうである。しかしこのことはリカードにおける價值實體論の成熟を意味するであろうか (pp. 112—3, 117—8)。ミ

ークはリカードが實體論へすすみながらつまづかざるをえなかったのは、價值と生産價格との「矛盾」によるとみる。さらにマルクスは、リカードの遺稿『絶對價值と交換價值』をしらなかつたが、もし彼がこれをしたならば、これを「矛盾」解決への前進と評價したであろうというが (pp. 119—20)、はたしてそうであろうか。前述の如く、ここにミークの價值論理解の限界が示されているように思われてならない。リカードがあまりにマルクス化されて把握されている、というよりは、より正しくは、マルクスがあまりにリカード化されて把握されているように思われてならない。(この點、結果的には、ミークは、最深部においては、從來の反マルクス主義者たちのリカード研究と動機の上では正反對でありながら、同一平面にあるかのようなのである。) ともかくミークの解釋は、リカードにおける實體概念の缺如を強調する私見と全く對蹠的である。(拙稿「デイヴィッド・リカード」「法學セミナー」1956年7月)

3

古典派の労働價值説、けっきよくマルクス價值論についてのミークの理解の限界は、マルクス價值論の批判に對する反批判をしるした第6章においてもある種の制限をもたらさざるをえないであろう。ミークは今日までの批判を3つの類型にわけた。(1) 純粹ベーム・バヴェルク的攻撃の類型——價值論の必要性はみとめるが、マルクスの價值論は事實と一致せず、役に立たぬ理論であるから、したがってまた、彼の全學說體系はこれによって崩壊するとみる。パレートがとりあげられている。(2) これには2種あって、(A) (1) と同じくある種の價值論の必要はみとめるが、マルクスの價值論は無効であるとし、それが限界效用説によって代置されるか又はこれと和解される場合には、マルクスの幾多の主要な命題は維持されうとするもの(ベルンシュタイン)、(B) マルクスの價值論は技術的には無効であるけれども、マルクスの體系においては、他の價值論がその屬する體系において演じるのとは全く異なる役割を演じているとみなすもの(リンゼイおよびクロウチェ)。(3) 價值論、すくなくともその用語の傳統的意味における價值論は全然無用であるとし、労働價值説がマルクスの體系において無用の贅物であることを證明するのにつとめるもの(ランゲ、シュレジンガー、ロビンソン)。しかもこれらの類型は全然相互に無關係に存するものではなく交叉しているのである。これらの3類型中最も現代的意義あるものは(3)であろう。ミークの論述もまた詳細であるが、労働價值説の有用性については、その分配論の基礎原理とし

ての意義を重視しているようである (pp. 229—30, 232—3, 236—7)。この点、ドップと共通である。さらにミーグは近代理論に対して全然否定的ではない。このことはランゲ批判の箇所をみればあきらかである (p. 228)。しかしこれは近代経済学とマルクス経済学との対決がいかになされるべきか、という根本的問題につながるので、いまここで論じることができない。全體として、ミーグの価値論観は量的側面に重心がおかれていることはあきらかである。(ドップについても、このことが云える。彼の『政治経済学と資本主義』をみれば、あきらかである。) これは彼の批判の相手方である近代経済学者の価値論観がいつのまにか彼に反映したものであろうか、あるいは彼等と共通の思考様式がもともと根底に存するの

であろうか。ミーグ自身、本書中でシュレジンガーの批判の最大の功績は、価値問題の質的局面に特に注意させた点にあるとのべているし (p. 234)、水田氏ののべるところでは、「ミーグは、さいきん、シュレジンガーの『カール・マルクス』から、質的考察について、おしえられたといっている」(『社会思想史の旅』, p. 57) そうである。したがって、ミーグがロビンソン女史の反批判をおこない、マルクス価値論の質的側面について女史が全く無関心である点をあげているが、その反批判は力強いものではない。この質的側面こそ、価値論の論理構造そのものに即しての史的唯物論の具体化が考えられるべき領域であったのである。

(1957. 2. 9. 遊部久藏)

ミーグ『労働価値論研究』の方法的見地からの検討

まえおき

編集部からの指示により、ミーグ『労働価値論研究』の第4章マルクスの価値論(I)、第5章マルクス価値論(II)を中心に、彼の労働価値論について、特に労働価値論の方法的見地から検討を加えて見たい。参考までに第4章、第5章の各節の見出しをつぎに掲げる。第4章、第1節リカードからマルクスへの価値論の発展、第2節マルクス経済思想の初期の発展、第3節マルクスの経済学的方法。第5章、第1節『資本論』第1章における価値の概念、第2節概念の精密化と発展、第3節概念の適用、第4節『資本論』第3巻における分析、となっている。第4章の内容を概説すれば、史的唯物論の生成過程を、マルクスの初期の著作、「ヘーゲル法律哲学批判序説」「経済学哲学手稿」「ドイツ、イデオロギー」「哲学の貧困」等々の検討を通じて追究しながら、史的唯物論の完成が労働価値論の出発点であること、『経済学批判』や『資本論』は、假説としての史的唯物論を確證するものだという結論を導き出している。いわば、史的唯物論と価値論との連関を生成史的に追思惟しているという点で、この章はとりわけ興味深い。とくに「経済学、哲学手稿」と史的唯物論との連関の追究は詳細に行われている。第5章では、いわゆる第1巻の価値論と第3巻の生産価格論の関連の問題、すなわち生産価格論は第1巻での分析によって把握された価値法則のモディファイされた貫徹形式であることの論證に力点がおかれ、そしてこの論證が『資本論』の中心課題であるとともに、またその限界を区劃するものだという見解が展開されている。ミーグによれば、「マルクスの研究の主要課題は、資本制的生産

諸関係がひき起す生産価格の価値からの背離の様式——すなわち、資本制生産諸関係が、資本制商品生産独自の供給価格をして、「単純」商品生産独自の供給価格から背離せしめる様式にあった。現実価格が供給価格から背離する原因についての論題はまったく捨象されている。」¹⁾ この現実価格の供給価格からの背離の問題が、独占資本主義段階での、価値論の主要問題となるのである。ミーグはここに『資本論』の限界とその具体化の緒口を見出そうとするのである。第5章はすべてこの問題意識によって貫かれているが、しかしミーグがこのような問題意識を持つようになったその方法的根拠は、第4章第3節の「マルクスの経済学的方法」にあると思われるので、われわれはこの節の検討を中心にして、彼のマルクス労働価値論の理解の仕方を検討して見たいと考える。

1

さてミーグはつぎのようにのべている。「マルクスが『資本論』で行った主な仕事は……生産諸関係の見地から資本制経済形態の起源と発展を説明するということにあった。商品生産一般の場合にも、特殊な資本制商品生産の場合にも、“生産の一定形態が……消費、分配、

1) R. L. Meek, *Studies in the Labour Theory of Value*, p. 288. なお, *ibid.*, pp. 154—156 参照。

なお、ミーグは価値が価格に等しいといわれる場合の価格とは、現実の市場価格を指すものではなく、供給価格 (Supply price) を指すものと解さねばならないと考える。供給価格には2つの型があって、1つは単純商品生産のもとのそれ、他は資本制商品生産のもとのそれである。(cf. *ibid.*, p. 199.)